

刺激ある多様で個性的なレジデンス体験

小松裕一郎（陶芸家／コロンバス州立美術学部准教授／アメリカ在住）

私は、米国の高校留学をきっかけに永住権を取得し、米国滞在は今年で 26 年になります。ニューヨークの大学でセラミック・アートを学んだ後、ドイツのベルリン芸術大学に 1 年間在籍して制作・発表しました。現在、米国ジョージア州コロンバス州立大学にて教鞭をとりながら、制作活動をしています。現職に就くまでの約 6 年間はいくつかの国で AIR に参加した経験があります。今日は作家の視点で、AIR で制作する意義、また制作中に考えた事など私の作品を通してお話したいと思います。

アーティストによって、AIR に参加することの理由や目的は様々です。ただ作品を作る場所を求めるのではなく、住み慣れた環境から離れ、文化・歴史的に異なる場所で制作することで人は刺激を感じます。視野の広がりや新しい発見などに影響されつつ制作することは重要だと思っています。

私が様々な文化圏で生活、又制作して学んだことは、人間の美意識や価値観、モノの見方が養われる際、その人の属している文化や歴史的要素が大きく影響しているということです。その様なことは当たり前だと言えばもちろんそうですが、特に価値観は普遍的なものではなく、ある条件が揃って偶発的に形成されます。私は主に抽象的なオブジェやインスタレーションを制作していますが、一時的な儚（はかな）さ、曖昧さに魅了されることがあり、この儚さという概念は私の作品のテーマの一つになっています。

アーティストとして向上するには、自分の価値観や制作プロセスなどを客観的に見ることができ、時には疑問視できる環境も大切だと思います。言葉が不自由で未知の環境に遭遇するほど、その効果があるのではないかと思います。こういうことで、多くの国でのプログラムに参加してきました。

私の創作活動のおもな材料は粘土です。粘土は世界各地で採れ、古今東西さまざまな用途に使われてきました。〈資料 1〉この自然物質である粘土が陶磁器になるには、窯で自然要素である火によって焼成され物質変化を経て完成されます。さらに、陶磁器はその時代が反映され、文化、歴史的要素が関与して初めて価値や定義が成立すると思います。粘土が陶器やオブジェになるには、物質的变化と文化的要素の 2 つが伴うことも興味深いことです。

私が米国以外ではじめて海外滞在制作したのはドイツのベルリンでした。〈資料 2〉既に 10 年ほど経つのですが、DAAD（ドイツ学術交流会）から奨学金をいただき、1 年間滞在しました。当時はアート・キャピタルといわれるニューヨークやロンドン以上にアーティストが集まっていて、とても刺激的な 1 年でした。

印象的だったのは、現代アートの捉え方です。商業的なアメリカや日本のマーケットに比べて、ヨーロッパのほうが市民の生活に溶けこんでいるように見えました。週末によく展示会に行ったのですが、理解が難しいコンセプチュアル・アートやパフォーマンス・アートのオープニングにも、子ども連れの家族の姿をよく見かけたものです。

ベルリンのもう一つの魅力は、変化の絶えない都市の風景や歴史的建造物です。〈資料 3〉私は陶芸制作者として、同じ空間芸術である建築にも興味があります。とくに東ドイツと

西ドイツの境界線があったベルリンは、それぞれが象徴する建物が並立して、これらの対照的な建築物やイデオロギーが有機的に絡まっている状態に鮮明な印象を受けました。ドイツ滞在中は、陶器の空間あるいは器の空間と建築空間との関係について考えました。先ほど価値観の曖昧さに魅了されると話しましたが、日米二つの異なる文化で育ったせいか、物体と周囲の空間の関係性などを探求するのが私の作品のテーマになっていました。

〈資料〇〉が当時の私の作品ですが、家庭的かつドメスティックな建築材料を使ったオブジェ、インスタレーションです。

このレンガには私がこれまで住んできた環境のさまざまなイメージを——デカールという技法を使って転写しました〈資料 4〉。トイレ、寝室などの日常的な風景、プライベートやパブリックな空間や現実的な空間、非現実的な空間など、様々入り混じったモノと空間との境界線をテーマに作りました。

〈資料 5〉はチューブ状の粘土を使った作品です。このシリーズは、建築が示唆するユートピア的な社会の実現と非実現をテーマとしています。子どもたちが遊び感覚で使う粘土という素材で、都市の模型を意識してつくっています。

〈資料 6〉も同じようなシリーズで、壁面です。2015 年夏に、ドイツのデュッセルドルフの大学の施設で制作し発表しました。

ドイツ滞在中に歴史のある額縁メーカーのショールームで見たアンティーク・フレームに魅了されました。その額縁のみを使って作品ができないかを試みました。額縁には、その中に納まる絵画を周りの空間と隔離する役目があります。その境界線や、西洋美術史の頂点に位置づけられる絵画と彫刻との関係性を模索するのも面白いと思い、そこで制作したのがこのフレーム・シリーズです〈資料 8〉。色々な額縁の型をシリコンで作り、顔料を含んだ強度石膏をその型に流し込みました。本来装飾的である額縁自体が作品となり、本来絵画の入る空間を空にしました。空といっても石膏は内側に流れこみ、有機的なデザインをつくり、そのデザインが額縁と絵画とのあいまいな空間に存在しています。

2008 年に、オランダにあるヨーロッパ・セラミック・ワークセンターという施設で 3 か月間制作しました。〈資料 9〉この施設は EU 圏内では最大で、毎年様々な分野のアーティストたちが選ばれて制作します。私が制作していた時は、陶芸の経験が少ないか、まったく経験したことのないアーティストやデザイナー、建築家などが、意図的に半数選ばれていました。従って、他の芸術分野のアーティストの視点や価値観から学ぶことも多々ありました。陶芸は歴史が古く、多様で伝統的な技術や技法がありますが、時に技術的に寄りすぎていると感ずることがあります。私も普段使わないテクニック、コンピュータを使った型づくりや、デザインのものを幾つか作りました。〈資料 10〉

2013 年、FAAP というブラジルのサンパウロにある私立大学の AIR に参加しました。この場所を選んだ理由の一つは、様々な現代芸術家が集まるプログラムで制作してみたい気持ちがあったからと、もう一つ、欧米の美術的概念や文化的背景から離れて制作したかったからです。特に現代アートや私が教育を受けたアメリカの美術教育は、ドイツ、フランスを筆頭にヨーロッパで培われた学術体系を基礎としているので、これらと違う文化を通して制作したいという気持ちがありました。

この頃、自分の作品は、アカデミックな教育を受けた為に概念的要素が強すぎると感じていました。ここで、作品作りの原点——原始的かつ有機的なフォルムを作りたいと思い、基本的な手びねりの技法で作りました。〈資料 11〉

この型は粘土や釉薬に、産地特有の性質や陶芸特有の釉薬を使わず、パステル系の色彩をうっすら感じさせるものにしました。〈資料 12〉は別のシリーズで、器をテーマにして作った作品です。

最後に、陶芸の森での制作を選んだのは、自然釉を使った優しい強さの信楽焼に魅せられたこともあります。自分の故郷である日本の文化、工芸、芸術を通して、伝統的美意識を再認識し理解を深め、今後の自分の作品に展開したいと思ったからです。〈資料 13〉今制作している作品のイメージをお見せしたいところですが、先日窯焚きを終えたばかりでお見せできません。いつか日本で展示する機会があればと願っています。



Clay(粘土/自然) > Ceramics(陶磁器/文化)

〈資料 1〉



Berlin, Germany



〈資料 2〉



〈資料 3〉

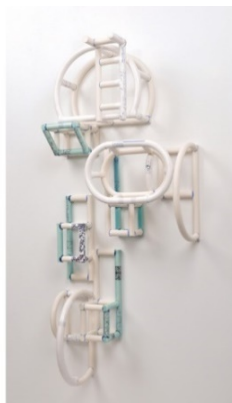


〈資料 4〉



model_I

〈資料 5〉



schema

〈資料 6〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」
パネル・ディスカッション 2



〈資料 7〉



untitled (frame series II)

〈資料 8〉



European Ceramic Work Center/EKWC, the Netherlands

〈資料 9〉



〈資料 10〉



biomorphic

〈資料 11〉



beyond objects and spaces

〈資料 12〉



〈資料 13〉